認定医ケースプレゼンテーション抄録

部分床義歯を用いて機能回復と外観の改善を図った唇顎口蓋裂症例

喜多 誠一

Case of the Cleft Lip and Palate Treated by Removable Partial Denture for the Rehabilitation of Oral Functions and Esthetic Improvement

Kita Seiichi

I. 症例の概要

患者：初診時 21 歳，男性。

主訴：発音障害および外観の不良。

初診：平成 4 年 10 月。

現病歴：唇顎口蓋裂に対して，昭和 46 年から昭和 53 年の間に，大阪大学歯学部附属病院第二口腔外科にて，口蓋形成手術，口唇形成手術が行われ，昭和 60 年から平成 3 年の間に，同院矯正科にて上顎歯列弓の拡大および前歯部被蓋関係の改善を目的とした歯列矯正が行われた。保定装置装着後，平成 4 年 10 月に，2|2 の先天性欠損と右側片側性の顎裂に対する欠損補綴処置のために，本院第二補綴科へ紹介された。

現症：初診時の口腔内（図 1）は，2|2 の先天性欠損により，2| 部に 2 歯相当分の隙と，|2 部に 1 歯相当分よりも狭い隙が認められた。また，2| 相当部から口蓋中央部にかけての骨欠損と，2| 相当部唇側における残遺孔を認めた。X 線写真所見では，3|1|1|3 の歯根の一部に吸収が認められ，歯槽骨および歯根膜による歯の支持が十分ではなく，軽度の動揺が認められた。一方，前歯部の被蓋関係は，切端咬合に近い状態まで改善され，また，臼歯部の咬合関係は安定しており，咬合異常は認めなかった。

大阪大学大学院歯学研究科統合機能口腔科学専攻顎口腔機能再建学講座（主任：野首孝祠教授）

Division of Oromaxillofacial Regeneration, The Course for Integrated Oral Science and Stomatology, Osaka University Graduate School of Dentistry (Chief : Prof. Nokubi Takashi)

保定装置（図 2）使用時には，唇側弧線と義歯床や人工歯の色調などによる外観の不良と，残遺孔からの呼気の漏洩による発音障害が認められた。

II. 診断と治療方針

診断：残遺孔からの呼気の漏洩による発音障害，保定装置の床や人工歯の色調による外観の不良。

治療方針：まず上記の問題点の改善を目的として，保定装置の床外形を基準としたレジン床の治療用義歯（図 3）を製作し，平成 4 年 12 月に装着した。その結果，発音機能および外観の改善が得られたが，なお義歯床の厚さによる装着時の不快感と，わずかではあるが開放性鼻声が認められた。そこで，新たに金属床による最終義歯を製作して，さらに装着感と発音機能ならびに外観の向上を図ることとした。

III. 治療内容

平成 5 年 5 月より，金属床による最終義歯の製作を開始した。まず，義歯床の厚さを薄く上げるとともに，床外形を小さくすることにより装着感の向上を図った。次に，2| 相当部唇側床縁を延ばすことにより，残遺孔の封鎖性を高めて発音機能の向上を図り，さらに硬質レジン前装法を維持装置と |2 部の人工歯に用いることにより，外観の向上を図ることとし，平成 5 年 7 月に最終義歯を装着した（図 4）。

図 1 Intraoral views at the first examination
初診時口腔内

図 3 Intraoral views with a treatment denture
治療用義歯装着時の口腔内

図 2 Intraoral views with a retainer
保定装置装着時の口腔内

図 4 Intraoral views with a new removable partial denture
最終義歯装着時の口腔内

IV. 経過観察と考察

平成 5 年 7 月の最終義歯装着後、定期的なリコールを行い、残存歯のメンテナンスと義歯の調整を継続して行ってきた。平成 6 年 5 月と平成 8 年 1 月にレジン前装部に剝離を認めたため、修理を行ったが、平成 12 年 1 月までの間、残存歯および義歯の状態は良好に経過している。

本症例では、支台歯および顎欠損の状態から判断して、部分床義歯による欠損補綴が第一選択であると考えられた。治療用義歯においては、装着時の異物感が問題であったが、最終義歯においては、金属床を用いることにより装着感が向上した。また、最終義歯においては、メタルフレームを上顎残存歯の口蓋側歯面と緊密に接触させることにより、把持効果を高めて義歯の安定を図るとともに、残存歯に対する二次固定効果による後戻りの防止を期待した。さらに、治療用義歯に比べて唇側床縁を拡大し、残遺孔を十分に閉鎖したことにより、呼気の漏洩が防止され発音機能を改善す

ることができた。

一方、外観の向上を図る目的で、維持装置および人工歯の一部に硬質レジンを築盛する¹⁾ことにより、患者のより高い満足が得られたが、リコール時に維持装置と人工歯のレジン前装部に剝離が認められ、修理が必要となった。これに対しては、鉤腕断面形態や硬質レジンを含めた前装法の改良²⁾の必要性があると考えられた。したがって、本症例に対しては、今後も引き続き定期的なリコールを実施し、齲蝕や歯周病に対する予防を図るとともに、義歯の適合性の診査ならびに破損への対応を行っていく必要があると考えられる。

文 献

- 1) 池邊一典, 吉備政仁, 小野高裕ほか. キャストクラスプに対する硬質レジンコーティング法の応用 第 1 報 鉤腕の曲げ剛性への影響. 補綴誌 37: 777-783, 1993.
- 2) 吉備政仁, 野首孝祠. キャストクラスプに対するレジンコーティング法—硬質レジンの弾性率が破折強さに及ぼす影響—. 第 100 回日本補綴歯科学会記念大会出版委員会編, 健康科学における歯科補綴学—21 世紀に目指すもの— 221, 東京: 日本補綴歯科学会, 1999.